

鉢形城歴史館・2013・11・10（日）

長尾景春と鉢形城

黒田基樹（駿河台大学）

I，長尾景春の政治的立場

景春の経歴

嘉吉3年（1443）生まれ。山内上杉氏家宰長尾景信（孫四郎家）の嫡子。母は越後長尾頼景の娘か。叔母婿に太田道灌があり、道灌よりも11歳年少。

文安元年（1444）、祖父長尾景仲は山内上杉氏家宰に就任。

享徳4年（康正元年、1455）正月、享徳の乱が展開。祖父景仲は山内家家宰に再任。

長祿2年（1458）、この頃から上杉方は武蔵五十子（本庄市）を本陣とする。

寛正2年（1461）4月、これ以前に景仲は景信に家宰職を譲る。

同4年8月、祖父景仲死去。

応仁元年（1467）、25歳から所見。仮名孫四郎を称す。妻は上野国衆沼田上野守（憲義・泰輝）の娘、景泰の姉妹か。

文明3年（1471）から官途名四郎右衛門尉で所見。

同5年6月、父景信が死去し、家督を継ぐ。官途名右衛門尉を称す。

家宰という政治的地位

家宰は、主家の家務の統括者であるとともに、分国支配の代行者。当主の代理であるとともに、家中の代表者。主家の決定は、家宰の判断による。

主家による所領充行・安堵、諸役賦課や免除、他家との権益をめぐる交渉など、すべて家宰の主導で行われる。

そのため家宰は、主家の直轄領の管轄など、大きな権益を有する。それを自身につながる同僚・被官に配分、それにより大きな政治勢力を形成。

II，鉢形城構築の背景

景信後継をめぐる紛争

文明5年（1473）6月の景信死去により、景春派は景春の家宰就任を期待。しかし山内上杉顕定は、宿老寺尾憲明・側近海野佐渡守の意見を容れ、後継に叔父で家宰に次ぐ政治的地位である武蔵守護代の長尾忠景（尾張守家）を指名。

忠景の家宰就任に対し、景春の傍輩・被官2、3千人が不満を持ち、景春を突き上げる。

五十子陣を封鎖し、また忠景方と、五十子陣につながる道路や、景春から忠景に引き渡されるべき所領の引き渡しをめぐる、所々で紛争が生じる。

家宰は、様々な権益を伴っていたが、それが景春の孫四郎家の手を離れると、同家に従っていた傍輩・被官はそうした権益を手放さなければならなくなるが、それは進退の維持に関わる重大な問題であった。傍輩・被官らは進退維持をかけて、景春を突き上げた。

太田道灌の調停

同6年12月以前、長尾忠景が正式に家宰に就任。太田道灌が和睦の仲介に乗り出す。道灌は景春を武蔵守護代に任じることで調整を働きかける。また景春を五十子陣から退去させるように献策。山内上杉氏は道灌の行動に不審を抱く。

同7年、道灌は五十子陣に参陣。景春はその途中で、道灌の宿所を訪れ、顕定追討の意向とそれへの協力を要請。道灌はそれを拒否して参陣。

道灌は顕定に、景春謀叛を注進、しかし顕定・忠景らは相手にせず聞き入れず。

同8年3月、道灌は駿河今川氏の内訌への対応のため、駿河に出陣。

同8年6月、景春は鉢形城を構築、五十子陣から移る。顕定・忠景は、景春の失脚と判断したか。

両勢力の対決へ

同年10月、道灌は駿河に帰陣。顕定・忠景との確執から、江戸城に在城したまま、五十子には参陣せず。

同年12月、家宰領の武蔵柴郷（横浜市）の引き渡しをめぐる紛争が激化。

家宰領の同郷は、家宰交替にともなって景春から忠景に引き渡されるべきところ、景春の被官（中間一人）は在郷したまま。同郷はそれを理由にして、忠景への年貢納入を拒否していた。

これに対して忠景は、合戦を覚悟で軍勢を派遣、景春被官を鉢形城に退去させることに成功。しかしその直後、景春方は蜂起する。

Ⅲ、鉢形城をめぐる攻防

長尾景春の乱の勃発

文明9年（1477）正月、景春は五十子陣を攻撃、叛乱を起こす。同時に古河公方足利成氏に支援を求める。

五十子陣は崩壊し、顕定・忠景ら上杉方首脳は上野に後退。

叛乱は、山内上杉氏勢力を二分した。景春方には、足利長尾氏・葛西大石氏・二宮大石氏の山内家宿老、上野長野氏・武蔵両長井氏・成田氏・豊島氏・毛呂氏・千葉実胤・相模金子氏・海老名氏・本間氏・甲斐加藤氏らの傍輩が味方。

同年3月、太田道灌が相模・武蔵南部の景春勢力の鎮圧を開始。

北武蔵での攻防

同年5月14日、上野から上杉方首脳を迎えるため、道灌は北武蔵に進軍。景春はそれの迎撃にあたる。しかし武蔵用土原で上杉方に敗戦、五十子付近の富田に後退。

同年7月、足利成氏が景春支援のため上野に進軍。上杉方は上野白井城に後退。その後、対戦のため同城から出陣。景春は成氏方の先陣を務める。

同10年正月、上杉方と足利方は和睦。成氏方は武蔵成田に後退。上杉方は景春追討を展開。

同年2月～4月、景春方の武蔵小机城をめぐる、武蔵南部で攻防。武蔵南部・相模・甲斐郡内の景春勢力は相次いで鎮圧されていく。

同年7月上旬、道灌は景春と対陣を続けていた主人・扇谷上杉定正を河越城に帰陣させるために、北武蔵に進軍。

17日、足利成氏は景春と断交、その討伐を上杉方に要請する。

18日、景春は上杉方の攻撃により後退、鉢形城も落城、秩父郡・児玉郡に逃れる。

鉢形城には、上野から帰還した顕定が入城。以後、その本拠とする。

これは道灌の献策という。「武蔵・上野両国を治める場所として重要なところ」という理由。

乱の終息

同年12月～同11年7月、道灌は景春の有力与党であった下総千葉氏攻めを展開。

同11年閏9月、景春は秩父郡から進出し、児玉郡で再び蜂起。

同年11月、道灌は景春方の児玉郡長井城（御嶽城のことか）攻撃のため、北武蔵に進軍。

同12年1月、景春は武蔵越生で扇谷上杉方に敗北、秩父郡に後退。その後、御嶽城は落城。

同年2月、足利成氏は室町幕府との和睦交渉に乗り出す。景春は「上杉長棟名代」として、その交渉にあたる。

同年5月、顕定は秩父郡に進軍。

同年6月13日、道灌も秩父郡に進軍。24日、秩父郡日野要害に籠城するが、道灌に攻略され没落。以後は、成氏を頼る。

同年10月、成氏は再度、景春を中心にして幕府との和睦交渉にあたる。結局、このルートは失敗。成氏は、上杉方の中心人物である越後上杉房定に仲介を依頼して和睦交渉をすすめていく。

文明13年4月、顕定の養子憲房を擁立し、依然として顕定に対抗か。

同14年11月、都鄙和睦。景春は成氏に従う。

同18年7月、太田道灌は主家扇谷上杉定正に殺害される。以後、両上杉氏の対立が展開。

主要参考文献

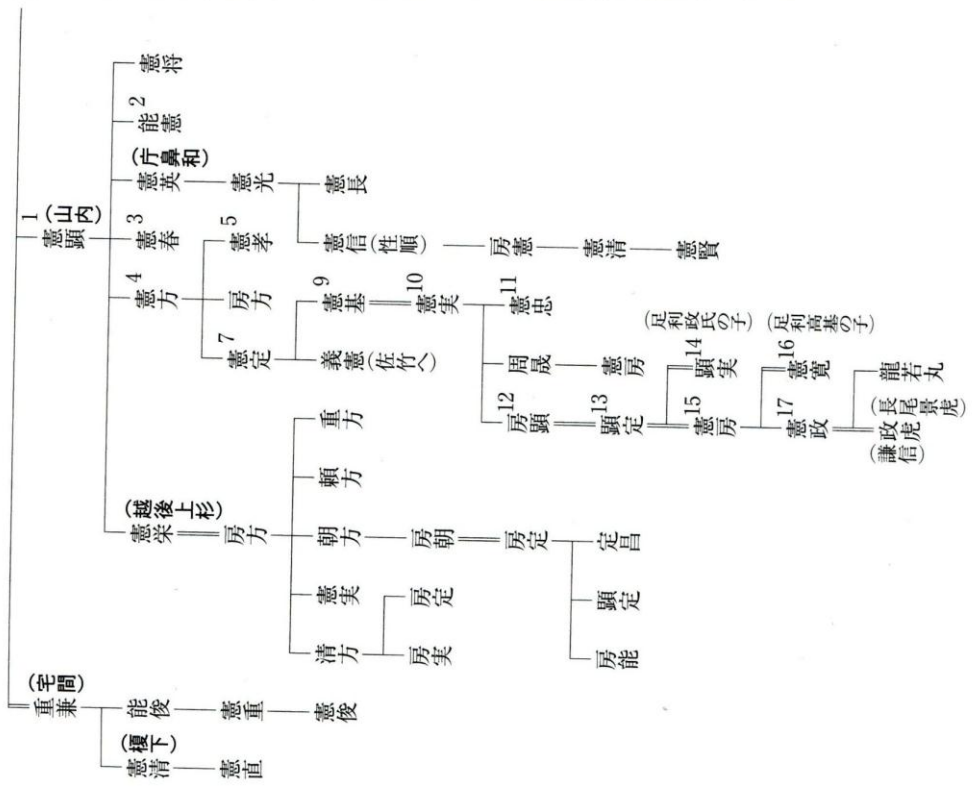
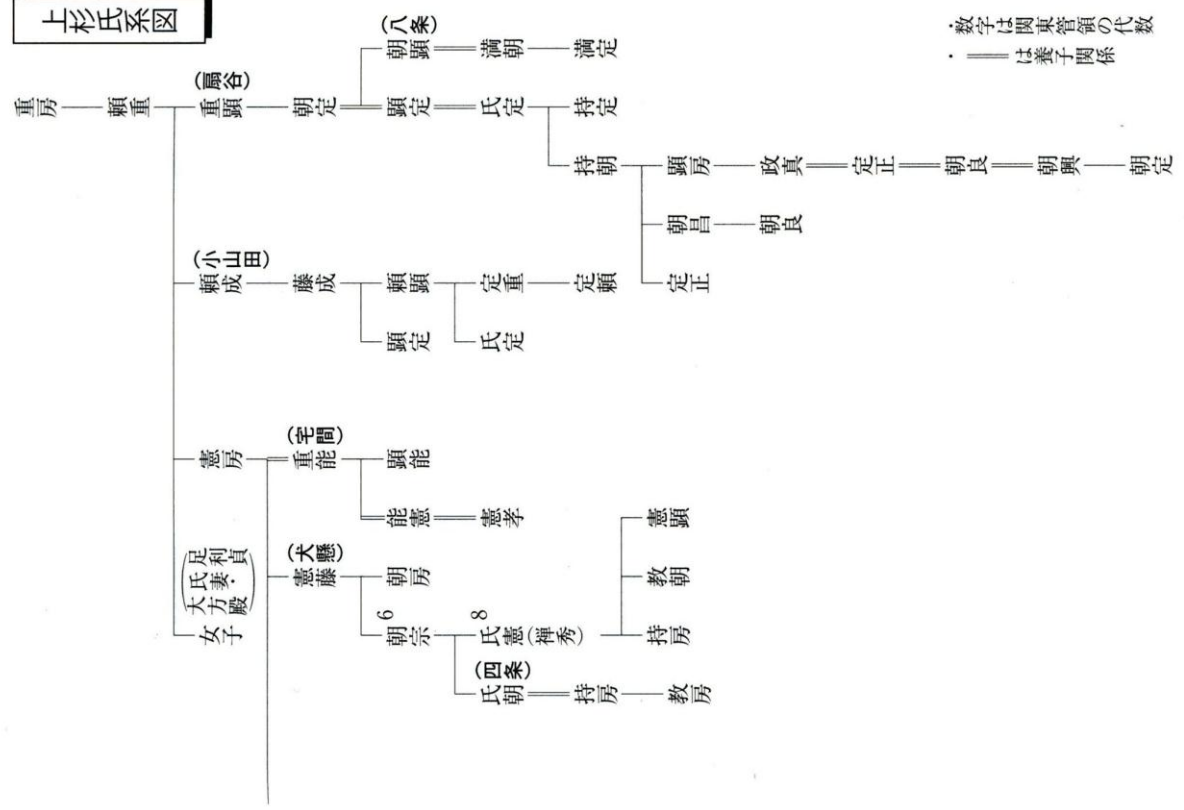
黒田基樹『扇谷上杉氏と太田道灌』岩田書院、2004年

『図説太田道灌』戎光祥出版、2009年

『戦国期山内上杉氏の研究』岩田書院、2013年

黒田基樹編『長尾景春〈シリーズ・中世関東武士の研究1〉』戎光祥出版、2010年

上杉氏系図



道灌時代の関東

関東地方の地形は、江戸時代における利根川の流路変更、そして戦後の霞ヶ浦干拓などで大きく変化した。特に道灌時代の関東地方は、最大河の利根川に荒川や綾瀬川などが合流し江戸内海に流れていたため、現在の東京・埼玉東部は広大な湿地帯を形成していた。また、現在の霞ヶ浦、利根川流路沿岸には香取内海と呼ばれる大小多数の湖と河川が広がっていた。

中世の風景



草戸千軒町復元模型（広島県立歴史博物館蔵） 草戸千軒町遺跡は、福山市街地の西郊を流れる芦田川の川底に埋もれた中世の集落跡である。中世の江戸湾周辺もこのような風景が広がっていただろう。



地方豪族の館（国立歴史民俗博物館蔵） 加治氏の中山館（埼玉県熊谷市）をモデルにして制作された復元模型である。

